

〔事例報告〕

初修中国語の発音指導におけるブレンド型授業の実践報告 — 非語学系学科を対象に —

許 挺 傑*

*日本文理大学 非常勤講師

A Report on the Practice of Blended Instruction in the Teaching of Chinese Pronunciation — Focusing on the Non-Language Departments —

Tingjie XU*

*Part-time Lecturer, Nippon Bunri University

1. はじめに

ブレンド型授業とは、一般的に、伝統的な教室での対面授業と、新しい学習形態である e-learning を融合させ、相互補完的に用い、より高い学習効果をあげようとする試みのことである(宮地編2009)。ブレンド型授業(以下 BL 授業)は教育効果の高い学習形態として注目されており、日本の中国語教育においても、意欲的な取り組みが多く紹介されている(趙他2012, 2013, 2014, 洪・藤本2012, 杉江・三ツ木2015, 杉江2017, Xu2022等)。

筆者は、初修中国語の発音指導に焦点を当て、① Zoom による同時双方向型オンライン授業、②復習用動画、③オンライン課題の3者を相補的に連携させた三位一体 BL 授業の実践を行った(許2022)。その結果、従来の非 BL 授業と比べ、授業外学習の促進、学習効果の向上といった効果を確認した。この取り組みは、2021年度前期 O 大学で開講した初修中国語の授業・中国語 I a で行ったものである。この授業は第二外国語としての初修中国語という位置づけである。週に1コマ開講し、O 大学のすべての学科の学生が履修可能である。しかし、授業履修者の大半は国際総合学科という学科の学生で、学科名の通り、いわゆる言語系の学科である。中国語専攻ではないものの、中国語の学習に高いモチベーション

を持っており、授業内練習はもちろん、授業外課題にも積極的に取り組む学生が多かった。そのため、先行研究で指摘されている学習のモチベーションが低いという問題(洪・藤本2012)は見受けられなかった。このような環境で実施した BL 授業が成果を上げたのはある意味当然の帰結であろう。

一方、日本の大学で第二外国語としての初修中国語を受講している学生の圧倒的大多数を占めるのは、非言語系学科の学習者であり、言語系学科の学習者と比べ、学習者の特性や受講動機、モチベーション等において多くの制約があるという(趙他2013)。

三位一体 BL 授業が、言語系学科の受講生が多かった O 大学では成果を上げたが、非言語系学科の受講生が多い場合でも同じ効果を発揮しうるかは不明である。そこで、本稿では、2022年度前期、非言語系学科の学生が履修する N 大学の初修中国語の授業で上記のような BL 授業を実施し、これまでの非 BL 授業(2021年度前期の授業)と比べ、どのような効果と課題があるかを検証する。

2. BL 型授業の概要と各構成部分の特徴

2-1 BL 型授業の概要とスケジュール

BL 授業は、2022年度前期 N 大学で開講した初修中国

語の授業・第二外国語1（中国語）で実施した。この授業は週に1コマ開講し、55名の受講者がいた。教科書は許（2022）で使用したものと同じく『中国語はじめの一步』である。また、教員自作のプリントも使用した。授業のスケジュールは、1回目「中国語概要と声調」、2回目「基礎母音」、3回目「複母音」、4回目「子音前半」⁽¹⁾、5回目「子音後半」、6回目「鼻母音」、7回目「まとめと発音テスト」の予定であったが、「子音後半」や「鼻母音」の学習量が多いほか、Zoomによる同時双方向型オンライン授業での授業進行の効率が悪かったため、7回目での発音テストの実施はできず、8回目を実施することになった。また、BL授業の構成は、2021年度前期O大学で行ったBL授業（許2022）と同じタイプのものとした。つまり、①Zoomによる同時双方向型オンライン授業、②復習用動画、③オンライン課題の3者をブレンドしたものである。

Zoomによる同時双方向型オンライン授業は、学生がビデオオフの状態を受講しているため、学生の反応が分からないまま授業を進行した。また、学生の氏名を呼び、反応を待ち、指示をするなど、発音練習の度にその作業を繰り返す必要があったため、授業進行の効率は悪かった。そのためか、2021年度前期のZoomによる同時双方向型オンライン授業（非BL授業）では、発音学習の成果は満足できるものではなかった（詳細は後述）。2022年度は、その反省とO大学での実践結果（許2022）を踏まえ、N大学でも三位一体BL授業を実施することにした。

2021年度の非BL授業は、発音指導のスケジュールそのものは2022年度のBL授業と同じであるが、2021年度時点でN大学の担当授業においてC-learningを未導入のため、計画的に復習用動画やオンライン課題を授業に組み込ませ、学生に利用させることはできなかった。

2-2 復習用動画の概要と利用状況

この節では、BL授業の構成要素である復習用動画の概要と学生（N=55）の利用状況について述べる（表1）。

表1を見ると分かるように、復習用動画は全部で7つある。動画はすべて筆者自身のYouTubeチャンネルにアップしている。この授業では、2022年度前期からC-learningという学習支援システムを利用しており、学生にはC-learningの教材倉庫に動画のリンクを掲載し、各回の授業後にリンクを通知することで利用を促している。動画は各週の内容に沿ってそれぞれ1つ作成しているが、鼻母音の回のみ、解説編と練習編の2つとなっている。ただし、2つの動画のリンクを学生に伝えるの

は、いずれも6回目「鼻母音」の後である。なお、動画視聴そのものは任意とした。

表1. 復習用動画の概要と利用状況

| 内容 | 長さ | 既読者数 | 既読率 |
|--------|----|------|-----|
| 声調 | 30 | 25 | 45% |
| 基礎母音 | 14 | 19 | 35% |
| 複母音 | 13 | 24 | 44% |
| 子音前半 | 32 | 31 | 56% |
| 子音後半 | 45 | 30 | 55% |
| 鼻母音解説編 | 20 | 30 | 55% |
| 鼻母音練習編 | 34 | 30 | 55% |
| 平均 | 27 | 27 | 49% |

表1の既読者数や既読率は、C-learningの教材倉庫にある動画リンクへのアクセス数をもとに算出したものである。各動画の既読率であるが、一番高いものは子音前半で56%、一番低いものは基礎母音で35%である。7つの動画の既読率の平均は49%であり、5割を切っている。

復習用動画の利用状況は良いとも、悪いとも言えず、中程度であると言えよう。しかし、2021年度のO大学で行ったBL授業では、複母音が77%以外、すべて80%以上の既読率であったため、O大学と比べると、N大学の復習用動画の既読率は低いと言わざるを得ない。とはいえ、動画視聴が任意であることを考えると、授業外学習はある程度促進されたと言えよう。

2-3 オンライン課題の概要と利用状況

この節では、BL授業の構成要素であるオンライン課題の概要と学生の利用状況について述べる（表2）。

授業後オンライン課題は、C-learningの機能を使って作成した中国語音声の聴解練習である。内容は2021年度O大学で利用したもの（許2022）と同じであり、以下の説明も一部引用した。

授業で習った発音の定着を図るための聴解練習は、声調の週のみ60問、それ以外の週はすべて90問、合計510問である。表の最上欄のtc1、d、tc2は、test challenge1、drill、test challenge2の略である。それぞれ「テスト・チャレンジ1回目（以下テスト1）」「ドリル（以下ドリル）」「テスト・チャレンジ2回目（以下テスト2）」という意味である。

どの週の練習も、基本的にテスト1→ドリル→テスト

表2. オンライン課題の概要

| | オンライン課題 | tc 1 | d | tc 2 | 計 |
|----------|-----------------|---------|-----|---------|-----|
| 声調 | 1.声調書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 2.声調書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| 基礎 母音 | 1.基礎母音聞き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 2.基礎母音書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 3.基礎母音と声調書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| 複母音 | 1.複母音聞き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 2.複母音書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 3.複母音と声調書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| 子音 前半 | 1.子音と母音聞き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 2.子音と母音書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 3.子音と母音と声調書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| 子音 後半 | 1.子音と母音聞き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 2.子音と母音書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 3.子音と母音と声調書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| 鼻母音 | 1.鼻母音聞き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 2.子音と鼻母音書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 3.子音と鼻母音と声調書き取り | 10 | 10 | 10 | 30 |
| | 合計 | 170 | 170 | 170 | 510 |

2の順で回答するように指示している。テスト1とテスト2は回答が必須で1回のみ回答可能である。ドリルは回答が任意で複数回回答可能である。テスト1はその週の授業終了直後から授業終了翌日までを回答期間として設定し、テスト2はテスト1の終了から次回の授業開始の2日前までを回答期間として設定した。一方、ドリルは、テスト2と同じ時期に公開するが、回答期間は特に設けず、テスト1の結果が良くない場合に、テスト2に行く前の練習として適宜使うよう指示した。なお、各学習項目（例えば声調の1.声調書き取りの問題）に対応す

るテスト1とドリルとテスト2は、基本的に同じ内容を使用している。これは問題作成時間の削減および反復練習の促進という意図のためである。ただし、ドリルの10問とテスト2の10問の出題順はランダムにしている。また、ほとんどの問題は、回答終了後、事前に録音した解説によるフィードバックが得られるようになっている。

では、表2のような授業後オンライン課題に対して、学生(N=55)はどのように利用していたのだろうか。

表3では、回答が必須のテスト(T)と回答が任意のドリル(D)に関する学生の回答状況および成績状況を示している。「回答者数」と「回答率」の2列は、テスト(T)とドリル(D)の比較を行うため、上段と下段にそれぞれの情報を記載している。一方、「合格率」「合格者数」「平均」等はテストのみの情報である。

まず、平均点の数値を確認する。平均点において、全体的に前半の「声調」「基礎母音」「複母音」の回が高く、後半の「子音前半」「子音後半」「鼻母音」の回が低い。これは、後半に行くほどより複雑で総合的な問題が出題されることが影響していると思われる。

表3. オンライン課題の回答状況⁽²⁾

| | 回答者数 | 回答率 | 合格率 | 合格者数 | 平均点 |
|------|---------------|----------------|-----|------|-----|
| 声調 | T:36 D:13 | T:65% D:24% | 69% | 25 | 7 |
| 基礎 | T:36 D:9 | T:65% D:16% | 83% | 30 | 8 |
| 複母 | T:37 D:5 | T:67% D:9% | 92% | 34 | 8 |
| 子前 | T:29 D:4 | T:53% D:7% | 86% | 25 | 7 |
| 子後 | T:27 D:3 | T:49% D:5% | 70% | 19 | 6 |
| 鼻母 | T:30 D:6 | T:55% D:11% | 70% | 21 | 5 |
| 全体平均 | T:32.5 D:7 | T:59% D:12% | 79% | 26 | 7 |

次に、回答率の数値を確認する。回答率の全体平均は、テストが59%で、ドリルが12%である。テストは回答が必須であるにもかかわらず、59%の回答率は高いとは言えず、また、ドリルは回答が任意であるとはいえ、

回答率が12%というの低いと言わざるを得ない。実際、2021年度O大学で実施した同じタイプのBL授業では、テストとドリルの平均回答率がそれぞれ81%と46%であったことから、O大学での実績と比べるとやはり全体的に数値は低いものである。このことは、2-2節で見た復習用動画の既読率と同じように、言語系学科と非言語系学科の学生の中国語学習に対するモチベーションの差によるものであると考えられる。

とはいえ、2021年度N大学で実施した非BL授業と比べると、テストの回答率が6割近くあったことは、授業外学習はその分促進されたと言えよう。

3. 結果と考察

3-1 発音テストの成績の比較

発音テストは、2021年度の非BL授業も2022年度のBL授業も同じものを使用している(表4)。ただし、実施のスケジュールや実施方法等において異なる点がある。2022年度のBL授業における発音テストは、発音指導終了後の8回目にZoomによる同時双方向型オンライン授業で実施した。いつもはビデオオフの状態で行っているが、発音テストの時のみ、全員ビデオオン状態で実施した。一方、2021年度の非BL授業では、発音指導終了後すぐには実施せず、前期末テストの際(16回目の授業)に、期末テストの一部として教室で実施した。

発音テストの内容は以下の表4の通りである。

表4. 発音テストの構成

| |
|--|
| 1.発音を聞いて、読まれた母音に○をつけてください。 問題1).a o |
| 2.発音を聞いて、読まれた子音に○をつけてください。 問題1).f h |
| 3.発音を聞いて、声調符号を正しくつけてください。 問題1).cha 問題6).a yi |
| 4.発音を聞いて、子音を書き取ってください。 問題1).()uo |
| 5.発音を聞いて、母音を書き取ってください。 問題1).m() |

問題1, 2は、母音と子音の聞き取り問題(2択)である。問題3, 4, 5はそれぞれ声調, 子音, 母音の書き取り問題である。各項目の問題数はいずれも10問で、

計50問である。点数は1問につき1点とし、50点満点である。なお、発音テストの問題の難易度は、BL授業の構成要素である③のC-learningを使った中国語音声の聴解練習の難易度と比べると、比較的低いものである。例えば、問題1, 2はいずれも2択の問題であるが、C-learningを使った中国語音声の聴解練習は、いずれも4択である。また、問題3, 4, 5はそれぞれ声調, 子音, 母音だけを書き取ればよいが、C-learningを使った中国語音声の聴解練習では、声調, 子音, 母音の3者を同時に書き取らなければならない問題も多く用意した。

以下では、N大学で開講した2021年度の非BL授業と2022年度のBL授業における発音テストの成績の比較を行う。発音テストについて、授業形態間におけるテストの総得点および各項目別の平均値の差を有意水準5%で両側検定のt検定(Welch's t-Test)により検討した。その結果は、表5の通りである。

表5. 授業形態間における発音テストの比較⁽³⁾

| | 2021年度 (N=70) | | 2022年度 (N=48) | | t |
|--------------------|------------------|------|------------------|------|--------------------|
| | M | SD | M | SD | |
| 総得点 | 26.93 | 7.1 | 32.42 | 7.93 | t(93)= 3.8182** |
| 問題1 | 6.96 | 1.28 | 8.15 | 1.34 | t(97)= 4.7848** |
| 問題2 | 6.8 | 1.68 | 7.1 | 1.64 | t(102)= 0.9588 |
| 問題3 | 6.2 | 2.38 | 7.71 | 2.52 | t(97)= 3.2448** |
| 問題4 | 3.23 | 1.8 | 4.52 | 2.21 | t(86)= 3.326** |
| 問題5 | 3.74 | 2.57 | 4.94 | 2.45 | t(104)= 2.5353* |
| 注: *p<.05, **p<.01 | | | | | |

「総得点」, 「問題1」, 「問題3」, 「問題4」, 「問題5」において、平均値の差は有意であった。一方、「問題2」は平均値の差は有意ではなかった。

「総得点」の平均が2021年度の26.93から2022年度の32.42に有意に上がっていることから、2021年度の非BL授業と比べ、2022年度のBL授業は、学生の中国語

音声の知覚能力を伸ばす点において有効であると言えよう。一方、標準偏差は、2021年度(7.1)と比べ、2022年度(7.93)は高い数値となっているため、発音テストを受けた学生の成績のバラつきが大きくなっていることも観察できる。これは、特にBL授業の場合、学習意欲の高い学生ほど授業時間外の復習用動画やオンライン課題を積極的に利用するため、学習意欲が高くない学生との差が大きくなりやすいことが原因であると考えられる。

次に、「問題1」、「問題3」、「問題4」、「問題5」の項目も平均点が有意に上昇していることから、2022年度のBL授業は、「母音の聞き取り」、「声調の書き取り」、「子音の書き取り」、「母音の書き取り」といった能力を伸ばす上で、2021年の非BL授業より効果があったと言えよう。

一方、「問題2」の「子音の聞き取り」の項目の平均点は、2021年度(6.8)と比べ、2022年度(7.1)は少し上昇したものの、特に有意な差はなかった。BL授業の実施はN大学の学生の「子音の聞き取り」能力を伸ばす点で、特に大きな影響を及ぼすことはできなかった。

最後に、「問題4」、「問題5」の子音と母音の書き取り問題であるが、この2つの問題はいずれも2021年度の平均点よりは有意に上昇したものの、どちらも合格点の6点台には及ばず、5点近くにとどまっている。これは、この2つの問題が比較的難易度が高いこと以外に、Zoomによる同時双方向型オンライン授業における練習効率の悪さ、復習用動画の既読率やオンライン課題の回答率の低さなども影響していると思われる。この点は今後の課題である。

3-2 結果の考察

前節では、授業形態間における発音テストの比較を行ったが、この節では、O大学で実施した同じタイプのBL授業の成果(許2022)と比べながら、今回N大学で実施したBL授業の成果と課題について述べる。

まず、「1. はじめに」のところでも述べたように、O大学の授業の受講者の大半は国際総合学科という言語系学科の学生である。中国語専攻ではないものの、中国語の学習に高いモチベーションを持っており、授業内練習はもちろん、授業外課題にも積極的に取り組む学生が多かった。一方、N大学の授業の受講者は、言語系学科の学生ではなく、いわゆる非言語系学科の学生である。もちろん、非言語系学科の学生でも、中国語の学習意欲が高い学生がいることは否定しないが、全体的に後者のほうが中国語の学習意欲やモチベーションが低いように

思われる。実際に復習用動画の既読率やオンライン課題の回答率を比較すると一目瞭然である。

次に、発音テストの成績の比較であるが、2022年度のBL授業は2021年度の非BL授業と比べ、確かに総得点の平均は有意に上昇した。しかし、この平均点は50点満中32点台であり、満足できる点数には至っていない。また、「問題4」、「問題5」の2項目もいずれも5点台にとどまっている。

一方、2021年度O大学で実施したBL授業の成績の平均は、39.31で40点近くになっている。「問題4」、「問題5」の2項目もそれぞれ6.6と6.57で、7点近くになっている。つまり、同じタイプのBL授業でも、O大学とN大学の成績にはかなり大きな差があることが認められる。点数の差は、先ほど述べた復習用動画の既読率やオンライン課題の回答率の差が大きく影響していることと思われる。この意味で、同じタイプのBL授業でも、受講学生の特性や学習意欲、モチベーション等の差によって、実施効果に差が表れうると言えよう。

4. まとめと今後の課題

本研究では、非言語系学科の学生が受講する初修中国語の授業で、①Zoomによる同時双方向型オンライン授業、②復習用動画、③オンライン課題の3者を相補的に連携させた三位一体BL授業の実践を行った。その結果、以下のような成果を上げることができた。

第1に、復習用動画や授業後のオンライン課題があることで、授業外学習がある程度促進された。

第2に、非BL授業と比べ、発音テストの総合得点の平均が有意に上昇していることから、学生の中国語音声の知覚能力を伸ばす点において、より有効であった。

一方、存在する課題も明らかになった。

第1に、比較的難易度の高い記述式の子音・母音の書き取り問題の2項目において、これまでの非BL授業と比べ、平均点は有意に上昇したものの、満足できる点数には至っていない。子音・母音の書き取り問題の得点を上げるべく、今後更なる工夫が求められる。

第2に、言語系学科の学生が主な履修者であったO大学でのBL授業の実践と比べると、発音テストの総合得点の平均において、大きな差があることが確認できた。これは、復習用動画の既読率や授業後オンライン課題の回答率が全体的に低いことが大きな要因であると分析した。また、その背後には、中国語学習に対する非言語系学科の学生の学習意欲やモチベーション上の制約等が影響していると考えられる。このことから、同じタイ

ブのBL授業でも、受講生の特性や学習意欲、モチベーション等の差によって、実施効果に差が表れうると言えよう。

今後はBL授業の構成要素や実施方法を改善していくと同時に、いかに学生たちのモチベーションを高め、より積極的に授業参加してもらうかということについても、しっかりと考えていく必要がある。

注

- (1) 子音はそれ自体の数が多いうえに、これまで習った基礎母音や複母音も一緒に練習する必要があるため、授業では、<b p m f>, <d t n l>, <g k h>の3組を「子音前半」, <j q x>, <zh ch sh r>, <z c s>の3組を「子音後半」として2回に分けて指導している。
- (2) スペースの制約上、声調、基礎母音、複母音、子音前半、子音後半、鼻母音をそれぞれ「声調」, 「基礎」, 「複母」, 「子前」, 「子後」, 「鼻母」と略して表示している。また、テストは1と2があるため、この表に記載している回答者数、回答率、合格者数、合格率、平均点はすべてテスト1とテスト2の平均である。
- (3) 発音テストの回を欠席した学生もいるため、この表の人数はこれまでの表の人数と異なる。

参考文献

- 伊景春・竹島毅 (2012) 『《最新2訂版》中国語はじめの一步』白水社
- 許挺傑 (2022) 「中国語の発音指導期におけるブレンド型授業の実践報告—中国語音声の知覚能力への影響を中心に—」『中国語教育』20, 73-93.
- 洪潔清・藤本茂雄 (2012) 「千葉大学中国語教育における Moodle の活用」『言語文化論叢』6, 101-115.
- 杉江聡子・三ツ木真実 (2015) 「遠隔交流を活用した中国語ブレンディッド・ラーニングの実践と混合研究方による評価」『教育システム情報学会誌』32 (2), 160-170.
- 杉江聡子 (2017) 「日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究」『中国語教育』15, 105-123.
- 趙秀敏・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大 (2012) 「第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングの開発と実践」『教育システム情報学会誌』29 (1), 49-62.
- 趙秀敏・富田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大 (2013) 「非語学系学科を対象とした第二外国語としての中国語学習における3段階ブレンディッドラーニングの実践」『教育システム情報学会誌』30 (4), 237-242.
- 趙秀敏・富田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大 (2014) 「第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングにおけるeラーニング教材設計指針の作成と実践」『教育システム情報学会誌』31 (1), 132-146.
- 宮地功編 (2009) 『eラーニングからブレンディッドラーニングへ』共立出版
- Xu, Tingjie. (2022) "A Comparative Study of Blended Learning and Face-to-Face Instruction in University-Level Chinese Language Education," *Inter Faculty*, 11, 261-267.
- 付記 本研究は令和4年度大分県立芸術文化短期大学研究費特別枠の助成を受けた。

(2022年12月20日受理)